「移動」の息づかい

栗田 匡相　准教授（開発経済学）

「もう、お父さんとお母さんに3年も会ってないらしいですよ、この子達」。2012年の8月中旬、2011年に起きた大洪水で村の大半の家屋が浸水し、農業生産にも多大なダメージを受けたカンボジアコンポントム州の農村で聞き取り調査をしている最中に通訳から聞いた言葉だ。

世界銀行が毎年発行する世界開発報告の2008年度版『開発のための農業』には、貧困から脱却するために必要な3つの経路として、農業生産性の向上、職業選択の多様性、そして「移動」、をあげている。「移動」をした人は移動先で職を見つけ、その稼ぎの一部を送金として、農村で暮らす家族や親族に届ける。このことによって、農村部で滞留していれば働き口も無かった移動者は職にありつき、その稼ぎの一部が農村で暮らす家族をも潤すので、「移動」は出て行った人と残った人の双方に貧困から脱却する道を提供できるのである。昨今めざましい発展を遂げているカンボジアだが、これまでの研究で、発展に大きく貢献してきたのが、農村から都市部の縫製工場へと出稼ぎに出る人々であることが知られている。また、最近では国内の「移動」だけではなく、近隣諸国のタイやマレーシアといった国々に出稼ぎに出る人も急増しており、その送金金額も2012年には2億5600万ドル、GDPの2%弱程度の金額にもなっている（図1）。先の世銀の見解も鑑みれば、カンボジアの農村調査において、世帯メンバーの誰かが移動をしていることや、その送金金額を聞くことは、開発経済学者として至極当然のことのように思えていた。

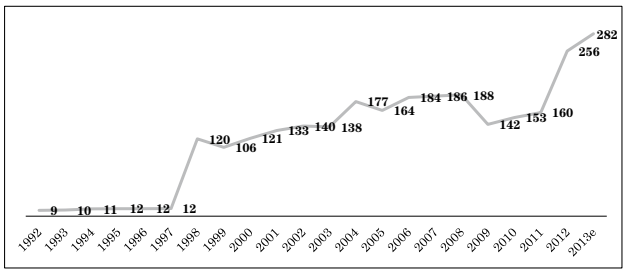
お父さんとお母さんに3年間もあっていないという子供達の両親は、タイに出稼ぎに出かけていた。最初は漁師の仕事として旅立ったようだが、就労ビザを取って合法的に出かけたのか定かではないようで、現在の職業はわからずじまい。送金も定期的に送られてくるわけではないようだ。この家だけが特殊なのではなく、他にも同じような状況の世帯が複数あった。調査

（コンポントムの子どもたち：佐藤由香子氏の撮影）

（キアンバー村のトウモロコシ畑：筆者撮影）

（キアンバー村でインタビューを行った女性と筆者）

図１：カンボジアにおける海外からの送金金額（単位：US100万ドル）



（データ出所：世界銀行Websiteより）

村の貧困者比率（カンボジア政府が定めた貧困ラインを下回る所得しか得られない世帯の比率）は37％程度。おおよそ3世帯に1世帯が貧困ライン未満の生活を送っている計算となる。そして、調査村のおおよそ6～7割の世帯で、世帯メンバーの誰かが出稼ぎを行っていたのである。世銀のレポート通りのストーリーでいけば、彼らは貧困脱却の道に乗っているようではあるが、何か釈然としない。

「怖くて、以前住んでいた村には住み続けることは出来なかった、だから残った家族と相談して、このキアンバー村に移り住んできました」。２０１３年の８月中旬、カンボジア訪問から1年後、場所は変わってケニアのリフトバレー州、キアンバー村で聞いた話だ。ケニアでは２００７年に国政選挙が行われたが、その直後から翌年にかけて「選挙後暴力」と呼ばれる暴動が各地で生じた。この選挙後暴力については紙面の関係上詳しくは述べないが、ケニアに未だ根強く残る民族間対立がその原因となっている。その中でも、キアンバー村で起きた教会焼き討ち事件は、教会に逃げ隠れていた人々が焼き討ちに遭い、36名もの人々が命を落とす大惨事となり、「選挙後暴力」の悲惨さとキアンバー村の名前を全世界にしらしめることとなった。世界開発報告の２０１１年度版は『紛争、安全保障と開発』である。その報告によれば、難民や国内避難民は過去30年間で3倍に増加しているようだ。

冒頭の女性は、その悲惨な選挙後暴力があったキアンバー村に選挙後に移り住んできたのである。それは何故か。彼女もまた、悲惨な選挙後暴力の犠牲者であった。「彼女は押さえつけられ、目の前で、夫がナタで首をはねられた、とのことです」と通訳が訳してくれた英語を聞いていた私は、何か自分が英語を聞き間違えたのではないか、と思ったし、そうあってほしいと願ったが、通訳の顔が沈痛な面持ちであるのを確認してから、「本当に申し訳ない、そんな辛い経験を伺ってしまってすいませんでした」と謝った。謝ることぐらいしか頭に浮かばなかった。情けない人間である。

でも、「何故、あなたはキアンバー村に来たのですか？キアンバー村にも悲惨な選挙後暴力があったのに」と聞かずにはいられなかった。これまたどうしょうもない人間だ。彼女はこう答えた。「あの村でなければよかった。キアンバー村は平和そうに見えたし、それでよかった」と。彼女とその子供達は、国際移住機関（ＩＯＭ）と日本の支援によって、写真にある家を建てることができたが、現在3人いる子供達も各地で住み込みの仕事をしており、彼女自身も隣村で住み込みの家政婦の仕事をしている。キアンバー村には時々戻ってきて、家の前にある小さな野菜畑を耕すのだが、一家そろって、キアンバーで暮らすのが難しいのは、その状況を聞けば明らかであった。どうにもやるせない思いを抱き、キアンバー村を後にした。

人々が生まれ故郷を離れて、「移動」をすることはとりたてて珍しいことでは無く、カンボジアの話にもあったように、グローバル化が進む今日、国のボーダーを越えて移動をする人々は年々増加している。また、世銀の報告書が述べているように、「移動」した人が行う送金は農村に住む貧しい家計の生活を助け、将来世代の教育投資に使われていたりもするだろう。そう考えると「移動」とは、貧しい人々の生活に幾ばくかの恩恵をもたらしつつも、確かに世界中どこにでも見られるありふれた光景であるのかもしれない。しかし、当たり前のことだが、人々が「移動」をするには人それぞれの理由があり、それは必ずしも祝福されたものばかりではない。

平均的な変化や、物事の多寡で議論をしがちな経済学は、「移動」をする人には、人それぞれ名前があり、その理由や状況が様々だということを忘却しがちなのかもしれない。いや、議論の射程が広範だからこそ、すり抜けていく事象なのかもしれない。だからこそ、全体と個という対置をクリアにする地点から計算と把握を始める伝統的なアプローチだけではなく、人々の息づかいをそのままに経済学の地平へと誘い、執り行うことをエコノミストとして考えてみたい。その思考と意志が強靱であれば、カンボジアやケニアで祝福されない「移動」に直面している人々との邂逅に、いつか必ずつながるはずである。

（データ出所：世界銀行Website より）